

研究 報告

三番茶不摘採園におけるチャ炭疽病の被害解析

静岡県立農林環境専門職大学 お 小 ざわ 澤 あき 朗 ひと 人

はじめに

チャ炭疽病 (*Discula theae-sinensis* (I. Miyake) Moriwaki & Toy. Sato) (図-1) は、発病葉上に茶褐色の不整形病斑を生じさせ、ひいては落葉を引き起こす糸状菌病害で、静岡県の茶産地では最重要病害の一つである。特に、静岡県の主要品種である‘やぶきた’は本病に罹病性であり、気象条件から本病が発生しやすい中山間地では、本病の対策として年間3~4回もの殺菌剤散布が行われている実態がある(西島, 2006)。

本病の潜伏期間は2週間程度と長く、感染した葉の多くは発病前に摘採されるため、本病による収穫物(摘採葉)への直接的な被害は少なく、摘採が行われる茶期では問題とならないことが多い(安藤, 1985)。しかし、翌年一番茶芽の母枝となる三番茶枝あるいは秋芽(四番茶)枝上の葉での発病が翌年の一番茶収量に影響し、多発茶園では翌年の一番茶の収量が大きく減少することが経験的に知られている。

近年、静岡県では、二番茶から秋冬番茶の摘採までの



図-1 ‘やぶきた’の三番茶葉で多発したチャ炭疽病の様子
発病葉の多くは翌春までに落葉する。

Loss Analysis of Tea Anthracnose Caused by *Discula theae-sinensis* (I. Miyake) Moriwaki & Toy. Sato, in Tea Fields where the Third Flush Tea is not Plucked. By Akihito Ozawa

(キーワード: チャ, 炭疽病, 被害解析, 被害許容水準, 要防除水準)

期間を摘採しない三番茶不摘採園が一般的となり、これらの茶園では感染に好適な梅雨期に三番茶葉が生育するため、従来の三番茶摘採園よりも発生は増加している。チャ炭疽病の翌年の収量への影響に関しては、鹿児島県の三番茶摘採園での先行研究があり、四番茶葉(秋芽)での発病が翌年の一番茶の摘採収量に影響すること(野中, 1983)が明らかになっているが、静岡県で一般的な三番茶不摘採園における収量への影響に関しては不明な点が多い。また、本病は、病斑上に形成された分生子が雨滴により飛散して感染すること(安藤, 1985)から、二番茶での発病程度が、次の三番茶での発病程度に大きく影響すると考えられるが、この感染量予測に関する知見はほとんどない。二番茶と三番茶での発病量の関係性が明確になれば、二番茶後に二番茶摘採残存葉における病葉数を調べることで、次の三番茶での防除の要否判断が可能になると考えられる。

筆者らは、罹病性品種である‘やぶきた’の三番茶不摘採園において、チャ炭疽病の発病が翌年の摘採収量に及ぼす影響を中心に被害解析を行い、三番茶での被害許容水準について検討するとともに、二番茶での発病程度と三番茶での発病程度との関係から二番茶摘採後の残存病葉数に基づく要防除水準についても検討した。本稿では、それらの結果を紹介する。なお、試験方法や調査方法の詳細は、小澤・西島(2023)を参照されたい。

I チャ炭疽病の発生茶期が翌年の収量に及ぼす影響

牧之原地区にある静岡県茶業研究センターの‘やぶきた’三番茶不摘採園を用いて、チャ炭疽病の発生茶期と翌年の収量との関係を調査した。ここでは、二番茶、三番茶、および秋芽のいずれの茶期での発生が、翌年の一番茶または二番茶の収量に最も影響するかを明らかにすることを目的とした。なお、摘採に当たっては正確な摘採収量を測定可能な自走レール走行式摘採機を使用し、肥培管理や整枝、裾刈りなどは慣行に従った。

2000年に二番茶、三番茶、秋芽の各生育期に、病気の発生を助長または抑制する処理を組合せた2×2×2